

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380847

研究課題名(和文) 道德感情の理解の発達：幼児期から青年期にかけての発達の規定因と道徳的行動への影響

研究課題名(英文) Development of moral emotion attributions from childhood to young adulthood

研究代表者

長谷川 真里 (Hasegawa, Mari)

横浜市立大学・都市社会文化研究科・教授

研究者番号：10376973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児、児童、青年における道德感情帰属を検討した。(1)幼児にHappy Victimizer反応がみられたが、被害者情報の強調などの場面操作により減少した。(2)入り混じった感情理解はHV反応の調整要因となる可能性が示唆された。(3)仲間関係のジレンマ場面では青年期になってもHV反応が見られた。(4)類似の欧米の研究と異なり、日本の青年はHappy Moralist反応が少なく、比較文化研究の必要性が示唆された。(5)道德感情帰属と行動の関連性について弱い証拠が得られた。幼児でも、道徳的意思決定に道德感情を利用することが示唆された。またそれは感情の種類によって発達の様相が異なった。

研究成果の概要(英文)：This study examined moral emotion attribution in children, adolescents, and young adults. There were five primary results. First, although young children showed “happy victimizer” (positive outcome-oriented emotions) reactions, their judgments varied according to context. Second, children who understand mixed emotions might be sensitive to specific contexts when, for example, moral rules are recalled. Third, even adolescents display happy victimizer reactions when asked to attribute information to an excluder within a peer exclusion scenario. Fourth, there were very few “happy moralist” (positive self-evaluative emotions for acting morally) reactions in some situations. Finally, there are some relationships between moral emotion attribution and moral behavior. Even young children judge about exclusion using information provided by moral emotions. Moreover, children found it easier to make judgments about exclusion based on guilt rather than pride.

研究分野：発達心理学

キーワード：道德感情 道德感情帰属 罪悪感 プライド Happy Victimizer

1. 研究開始当初の背景

道徳感情の発達研究において、道徳感情帰属は中心的なテーマである (Arsenio, Gold, & Adams, 2006)。道徳感情が生まれるのは、自我が芽生え、社会的ルールの理解が始まる、2, 3歳くらいである (Lewis, 2008)。道徳感情帰属とは、道徳的な問題に関わる行動によってその行為者がどのような感情を持つのかを推測することをさす。たとえば、道徳的ルール違反をしてしまった「違反者」がどのような気持ちになるのかを推測させる、というものである。道徳感情帰属の研究は、子どもが罪悪感やプライドを感じたり予測したりすることが適切な道徳的行動と関連するため、道徳性の発達を探る上で非常に重要であると考えられている (Malti & Krettenauer, 2013)。

幼児でさえも道徳的違背は悪いことを知っている (Smetana, 2006)。そして、幼い子どもが犠牲者や被害者の痛みや損失に敏感であることは繰り返し指摘されている (Hoffman, 1983; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, & King, 1979)。よって、子どもが道徳的逸脱行為をしたときにその子どもがネガティブな気持ちになるだろうと大人が予測することは納得できる結果である (Zelko, Duncan, Barden, Garber, & Masters, 1986)。しかし実際は、年少者は違反者が違反後に嬉しい、あるいは満足などの肯定的な感情を抱くだろうと予想する傾向がある (Arsenio & Kramer, 1992)。これは、ハッピー・ヴィクティマイザー (Happy Victimizer; 以降 HV と記述) と呼ばれる現象であり、多くの研究で繰り返し見出されている (レビューとして; Arsenio et al., 2006)。

しかしながら、なぜ幼児が「幸せな加害者」反応を示すのか、結論は出ていない。また、研究は幼児期に集中しており、児童期以降の道徳感情帰属の発達についてはあまり検討

されていない。さらには、日本での調査はほとんどなく、欧米と同様の現象が日本の子どもにも見られるのかがはっきりしない。このように、道徳感情帰属の発達について、幼児期から青年期にかけての長期的な発達の様相を明らかにすることが必要であった。その際、幼児期については、入り混じった感情の理解などの認知的な要因が関係し、青年期には仲間関係と関連があると予想した。最後に、道徳感情帰属と適応や行動の関係も探ることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児、児童、青年における道徳感情の理解の発達を、道徳的逸脱行動または向社会的行動によって引き起こされる感情の推測 (=道徳感情帰属) を求めることから検討するものである。特に次の4点について検討を行った。(1) 日本の子どもに HV 反応が生じるのか、(2) HV 反応と入り混じった感情理解の関係、(3) HV 反応と仲間関係の関係、(4) 道徳感情帰属と行動や適応感との関連である。

3. 研究の方法

道徳感情帰属の課題は、海外の先行研究と同様に、ハッピー・ヴィクティマイザー課題と同じ構造の場面を用いた。つまり、個人的な利益を満たすために道徳的逸脱行動をするという逸脱者のストーリーである。なお、幼児と小学低学年はすべて個人インタビューを行い、小学中学年以上の児童と青年に対しては質問紙を用いて調査を行った。

検討点1 (日本の子どもに HV 反応が生じるのか) については、年長児と小学2、3年生を対象に、上述のような HV 課題を用いて、加害者の感情帰属を求めた。その際、「それ以外の気持ちはないのか」という、別の気持ちも推測させた。その結果、日本の幼児に HV 反応がみられ、また、犠牲者情報の強調

などの提示場面の操作により HV 反応の減少が確認された。

成果は、Hasegawa, M. (2018). Developing moral emotion attributions in happy victimizer task: Role of victim information. *Japanese Psychological Research*, **60**, 38-46. および長谷川真里 (2018). 幼児と小3生の道徳感情帰属の発達: Happy Victimizer 課題からの検討 横浜市立大学論叢人文科学系列, **69**, 29-42. に発表した。

検討点2 (HV 反応と入り混じった感情理解の関係) については、入り混じった感情が HV 反応と関係があるという指摘があるものの直接的な検討がないことを受け、主に幼児を対象に検討した。第1に、説明を求める課題 (道徳的に入り混じった感情を抱いた加害者がなぜその感情を抱いたのかの説明を求める課題) を用いて、幼児期から児童期前期にかけての入り混じった感情の理解の発達を探った。第2に、入り混じった感情理解課題 (道徳的場面ではない一般的な場面の課題) の成績と HV 反応の関係を調べた。その結果、入り混じった感情理解が HV と関係するのみならず調整要因となることが示唆された。

成果は論文としてまとめ、現在審査中である。

検討点3 (HV 反応と仲間関係の関係) については、仲間関係のジレンマ場面を用いることにより、青年期にまで拡張して検討した。道徳逸脱行動 (慣習違反または道徳違反) をしようとする仲間に同調して逸脱行動をするか、それとしないかについての意思決定、およびその時抱く感情の推測を求めた。欧米の同様の研究では青年期において Happy Moral list 反応 (道徳的に良い行動に対する肯定的な自己評価的感情の帰属) が多くなるが、本研究では、文脈によっては青年期であって

も Happy Victimizer 反応が残ることが示され、感情帰属の研究は文脈と文化の両方について考慮して行う必要性が示唆された。

成果は Hasegawa, M. (2016).

Development of moral emotions and decision-making from childhood to young adulthood. *Journal of moral education*, **45**, 387-399. に発表した。

検討点4 (道徳感情帰属と行動の関連) については、幼児については感情と行動の関連の理解、および感情を情報として使用して道徳的意思決定を行うかの検討をした。青年期については、道徳感情帰属と心理的適応についての関連を探った。前者については、幼児でも道徳感情と行動の関係を理解し、また、道徳感情を情報として使用し social exclusion の判断を行った。ただしこれらは直感的な理解にとどまることも示唆された。さらに、道徳感情の valence (例えば罪悪感かプライドか) によって判断と発達の様相が異なることが示された。後者については、感情帰属と適応観に関係がある弱い証拠が得られた。

成果は Hasegawa (2016). Do Moral Decisions Make Us Happy?: Developing the Relationship between Moral Decision Making, Emotion, and Well-Being. *International Journal of Psychology*, **51**, 384. および Hasegawa (in press). Understanding of moral emotions and social exclusion in pre-schoolers and third graders. *European Journal of Developmental Psychology*. に発表した。

4. 研究成果

幼児から大学生にかけての道徳感情帰属の発達、および行動や意思決定との関連を検討した。幼児期には認知的要因、青年期には仲間関係の要因など、関係する要因が異なる可能性が高い一方で、たとえ認知的には成熟した青年であっても、文脈によっては HV 反

応が見られることも示された。また、感情の valence（例えば罪悪感かプライドかなど）によって反応や発達の様相が異なることが示唆された。道徳感情帰属の発達研究は、海外も含めて、一貫した理論を構築できるほど知見が集まっていない。しかしながら、道徳感情が道徳的行動に影響することは繰り返し指摘されていることを考えると、今後も注目されるべき研究テーマであるといえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計9件)

- (1) Hasegawa, M. (in press). Understanding of moral emotions and social exclusion in pre-schoolers and Third graders. *European Journal of Developmental Psychology*.
- (2) 長谷川真里 (2018). 幼児と小3生の道徳感情帰属の発達 Happy Victimizer 課題からの検討 横浜市立大学論叢, **69**, 29-42.
- (3) Hasegawa, M. (2018). Developing Moral emotion attributions in happy victimizer task: Role of victim information. *Japanese Psychological Research*, **60**, 38-46.
- (4) 長谷川真里 (2017). 道徳性の芽生え 新教育課程ライブラリ, **9**, 12-13.
- (5) Hasegawa, M. (2016). Development of moral emotions and decision-making from childhood to young adulthood. *Journal of moral education*, **45**, 387-399.
- (6) 長谷川真里 (2016). 社会科教育と社会認識の発達 児童心理学の進歩, **55**, 82-103.
- (7) 長谷川真里 (2015). 先生に言いつける、告げ口をする 児童心理, **69**, 36-40.
- (8) 長谷川真里・外山紀子 (2014). 人権に関

する社会人の社会的判断 : 一般社会人と哲学者へのインタビュー調査からの検討 横浜市立大学論叢, **66**, 31-50.

- (9) 長谷川真里 (2014). 信念の多様性についての子どもの理解: 相対主義, 寛容性, 心の理論からの検討 発達心理学研究, **25**, 345-355.

〔学会発表〕(計3件)

- (1) Hasegawa, M. (2017). The development of understanding of moral emotions and social exclusion in preschoolers and 3rd graders. *18th European Conference on Developmental Psychology*. (Utrecht, Netherlands).
- (2) Hasegawa, M. (2016). Do moral decisions make us happy? : Developing the relationship between moral decision making, emotion, and well-being *International Journal of Psychology*, **51**, 384. (Yokohama, Japan).
- (3) Hasegawa, M. (2014). Panel survey on tolerating different opinions on interpersonal networks of university students. *28th International Congress of Applied Psychology* (Paris, France).

〔図書〕(計3件)

- (1) 長谷川真里 (2018). 子どもは善悪をどのように理解するのか?: 道徳性発達の探究 ちとせプレス ISBN:4908736081
- (2) 長谷川真里 (2018). 正義と法の発達心理学 唐沢穰・松村良之・奥田太郎(編著) 責任と法意識の人間科学 勁草書房 (pp.195-212).
- (3) 長谷川真里 (2014). 発達心理学 心の謎を探る旅 北樹出版 ISBN:4779304393

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川真里（HASEGAWA, Mari）

横浜市立大学 都市社会文化研究科・教授

研究者番号：10376973

(2) 研究分担者

なし（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし（ ）

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし（ ）